

アバン

ヶ原 「大型トラックを真正面から見ると平成ライダーみたいですよねこんにちは。改めまして、平成ガール戦場ヶ原ひたぎです」

羽川 「平成ガール？ ガールって今全員平成でしょ？ え、ちよつと待って、その前、なんて言った？」

ヶ原 「大型トラックを真正面から見ると平成ライダーみたいですよね」

羽川 「えー、なにそれ、どういうこと……」

ヶ原 「ほら、フロントガラスがアイシールドで、真ん中の段々のところが口で」

羽川 「ほらほら戦場ヶ原さん、妹さんたちだよ。阿良々木火憐ちゃんと、阿良々木月火ちゃん。かわいいよねー」

ヶ原 「私をスルーするってどういうこと」

羽川 「どうもこうもああもそうもないです」

ヶ原 「ん、でもあれ、誰あの姫カットの子。妹？ じゃああれが噂の中くらいの方の妹？」

羽川 「中くらいの方の妹なんて、だからいないって」

ヶ原 「あらそう」

羽川 「月火ちゃん、あの子はよく髪型を変えるんだよ。前作のときは概ね、この髪型だったの。だけど今回はばつさり切って」

ヶ原 「ふうん、思い切ったものね。だけど、髪型と言えば羽川さんも……っていやまあこの話題は、副音声的にはまだ時期尚早なのかしら」

羽川 「そうだね。この第一巻ではまだしない方がいい話かな」

ヶ原 「ふむ、この話を聞きたければ第二巻を買ってもらおうしかない」

羽川 「いやらしい言い方をするな……ん？ つまり戦場ヶ原さん、それは第二巻の副音声を私が担当しますと、そういう宣言と受け取っていいのかしら？」

ヶ原 「買ってもらえるんだったら私がするわよ」

羽川 「予想外の答え」

ヶ原 「まあ、同じメンバーでというわけにはいかないでしょうから、その場合はそうね、パートナーとして神原でも呼んで」

羽川 「あなたは神原さんをなんだと知っているの……いや、これ確か、三話あたりでも受けていた質問だと思うけれど」

ヶ原 「おもしろいことを言おうとしなければ、神原はとても便利な後輩よ」

羽川 「最悪だ……確かにおもしろくない」

ヶ原 「え？ 不便な後輩って言われて嬉しい子がいるの？」

羽川 「便利って言われても嬉しい子はいない」

ヶ原 「あつ、ちよつと黙って」

OP

ヶ原 「なにこの名曲。歴史に名を残すクラシックと並べて語るべきこの戦慄する旋律は……ってあら、私のじゃないわ」

羽川「うん、違うね。これは火憐ちゃんのオープニング」

ヶ原「あれ、なんで、どうして。わからないわからない。どうして違う人の曲が流れるの」

羽川「いやだって、基本的に火憐ちゃんのお話、かれんビーなんだから、火憐ちゃんの曲になるのは当たり前じゃない」

ヶ原「えー」

羽川「すごい不満そう……：…ていうか戦場ヶ原さん、テレビ放送見て知ってるはずでしょう？ 二話のオープニングが火憐ちゃんだったってことは」

ヶ原「そうね、うっかり忘れていたわ。オープニングと言えば私、みたいな気持ちだったわ」

羽川「これは、火憐ちゃんらしい元気な曲だよ」

ヶ原「こんなかつこいい子が妹だっていうのは、結構なプレッシャーよね」

羽川「あ、そうだね」

ヶ原「自分より背は高いし戦えるし人気者だし、阿良々木くんがひねくれるのもわかるわよね」

羽川「まあまあ。阿良々木くんにとって、妹さんが一つのコンプレックスになってるのは確かだろうね」

ヶ原「月火さんに対してもありそうよね」

羽川「あつ、この辺。ほら、これがさつき戦場ヶ原さんが言ってた、走るオープニングってやつ？」

ヶ原「いえ、この子は走りすぎでしょ。炎が生じるレベルで走るオープニングは見たことがない。この子神原とタメ張るんじゃない？」

羽川「まあ、そのあたりのエピソードはアニメ偽物語の後半であつたりなかったり」

ヶ原「ついでに言うわけじゃないけれど、神原は神原で私にとって結構なコンプレックスだったりするのよね。あんな真っ直ぐな馬鹿、羨ましくて仕方ないわ」

羽川「そういうことを言っただければいいんじゃないの？」

A.パート

羽川「さ、始まったね。千石ちゃん登場♪」

ヶ原「ばちばちばちばち」

羽川「改めて確認するけれど、知ってるでいいんだよ。戦場ヶ原さん、千石ちゃんのこと」

ヶ原「まあ、世間並みには」

羽川「世間並み……度合いが気になるなあ」

ヶ原「阿良々木くんよりは知っているかもしれない。私もそういえば、阿良々木くんの前で勇気を振り絞つて、前髪を上げたことがあつたわね」

羽川「ううん？ あつたっけ……あつ、あのお弁当食べてるとき？ 前作十二話？ テレビ版最終回？ あれは勇気じゃなくて、油断の産物でしょう？ 家で食事するときの格好でしょう、あれ」

ヶ原「いえいえ。あれは油断をした一面を見せて気を許している振り、という打ち解けた演技をする女子力よ」

羽川「腹黒すぎる……そんな女子力があれば、あなたの人生はもっと華やかなんじゃないの……？」

ヶ原「演技力には自身があるんだけどね。まあ仰る通りというか、今はもっと、阿良々木くんの前では気が緩みがちね。シャワー上がりでうっかり裸で前に出ちゃったり」

羽川「それ、一番最初じゃなかったっけ……」
ヶ原「鍵を閉めたわ」

羽川 「鍵を閉めたね」

ヶ原 「防犯意識が、ちゃんと、している、子ね。感心、感心」

羽川 「そこまで大人気を発揮しなくてもいいんだよ……」

ヶ原 「なんでしようね、みんなが私に怒るんじゃないかと期待しているときには、意地でも怒りたくなくなるのよね」

羽川 「ひねくれてるなあ。なにその性格」

ヶ原 「いや言わないけれど、唾棄するほど嫌いな人間から迂闊にも受け継いでしまった性格。私が私の中で、一番修正したい部分。

ベッドの上……いいじゃないの勧めたら。そう、そして部屋が暑いのなら裸にでもなればいいじゃないの」

羽川 「大人の余裕じゃなくなってきてるよ、もう。そうやってスルーし続けることで、後々大変なことになる

かもしれないよ？ 火種が小さいうちにスッキリしておいた方がいいと思うけどなあ」

ヶ原 「スッキリするというのはつまり、阿良々木くんの首を刎ねろと」

羽川 「違う」

ヶ原 「私に羽川翼になれと」

羽川 「私の名前をそんな風に変換しないで……」

ヶ原 「おお、タンクトップセクシー」

羽川 「なんだか、線の細いところもあるけれど、こうして見ると男の子、って感じだよ。腹筋も素晴らしいし」

ヶ原 「いえ、別に腹筋は見えていないけれど……この腋もセクシーね。これは大人としてやられた感があるわ」

羽川 「腋にやられないで、大人が」

ヶ原 「羽川さん是可以る？ このストラップハーフブローケン」

羽川 「必要性を感じないからできないけれど……え？ この着こなし、技名があるの？」

ヶ原 「いや、この技名は私が思いつきでつけたものだけれど、まあ思わぬものに名前があるとびっくりするわよね」

羽川 「戦場ヶ原さんは王様ゲームってしたことある？」

ヶ原 「最近はやらないけれど、そうね、昔は慣らしたものだっただわね」

羽川 「やったことがあると」

ヶ原 「あるわね」

羽川 「一人で」

ヶ原 「一人ね。」

この本棚ってフェイクなのよ。偽本棚なのよね」

羽川 「うん、そういうこと。私、千石ちゃんと話したことがあるから知っているけれど、基本あの子、漫画しか読まないよ。ドラえもん大好き」

ヶ原 「神原が昔、『ドラえもん』の『ラ』の字を『裸』って書いて、『下裸えもん』って言っていたわ。弩級に裸な未来のロボットだって」

羽川 「あの子、『ら』という言葉全て『裸』に変換してない……？」

ヶ原「あ、でもここから、真面目な話に入る」

羽川「真面目な話をするためには、その前にふざけなければならぬ、というルールでもあるのかしら。阿良々木くんの中には」

ヶ原「別に、シリアス一辺倒になってくれて私は全然いいんだけど。初期の阿良々木くん、って言ったら今が後期みたいだけれど、初期のニヒルでクールな阿良々木くんも私は嫌いじゃなかったのよ。クラスメイトとしては警戒していたけれど」

羽川「してたんだ」

ヶ原「そりやしますがな」

羽川「がなって」

ヶ原「私は同じクラスで、阿良々木くんが落ちぶれる様子をね、ずっとそばで観察していたんだから、彼のパーソナリティーをよく知ってるわけなのよ」

羽川「それ、落ちぶれるじゃなくて、落ちこぼれる、だよな？ 成績のことを言ってるんだとしたら」

ヶ原「あ、普通に間違えちゃった。でもいいんじゃないかしら、実際、落ちぶれてもいるわけだし」

羽川「いえ、阿良々木くんは別に没落してはいません」

ヶ原「冒頭だったから触れずにここまできてたことを蒸し返すけど、そもそもなんで私たちは夏休みを潰してまであの男の面倒を見てあげなくちゃいけないの」

羽川「そこ、疑問持つちゃだめ。背景を語っておくと、阿良々木くんが大学に行く気になったから、私たちが恩返しの気持ちで、家庭教師役を買って出ているという感じですよ」

ヶ原『「この埋め合わせは絶対にするから」っておかしいでしょ。なんで羽川さんがそこまでしなくちゃいけないの」

羽川「それには実は理由があります」

ヶ原「この妹さんたちのかわいさは認めざるを得ない」

羽川「かわいいよねー」

ヶ原「両方かわいいと思うけれど、このシーンであえてどちらかを選べと言われたら、私は火憐ちゃんのポーズを推すのよ、なぜか」

羽川「なぜかって……別に何も聞いてないけれど……」

ヶ原「それは、目隠しのポーズがエロいからよ」

羽川「あっさい理由だね」

ヶ原「こういうことを言うと、心ない人たちから誤解されてしまうかもしれないと思ったから今まで黙っていたけれど」

羽川「黙ったままでいた方がいいと思うに一票……」

ヶ原「私、結構目隠しフェチ、みたいなのがあるがあってね」

羽川「民意が反映されなかったなあ……」

ヶ原「でも、誰にだってあるでしょう、フェチって。それを頭ごなしに否定してほしくないわ」

羽川「まあ、確かに認められるべき権利だね」

ヶ原「ね。だからいいのよ、私がお父さんが寝ているときにネクタイで目隠しをして、悦に入っていた話とかをしても」

羽川「よくない！ ……とか？ 今と違って言った？ まさかそんな話がいっぱいあるの？」

ヶ原「回想のカットがとめどなくエッチなんだけれど、彼は前作の第四巻で一体何をしてたの」

羽川 「あつ、そろそろ千石家編おしまいかな。私もね、千石ちゃんは前髪上げてた方がかわいいと思う」

ケ原 「髪を下ろしているときを知らないからなんとも言えないわ。でもね、これあれよ、今きつとね裏音声でね、月火さん？ 月火さんがね、この髪型に対して、『これじゃあ撫子じゃなくておでこだよ』とか言ってると思うのよ」

羽川 「話したことの無い子の勝手なセリフを考えないで」

ケ原 「次はツイスターゲームをやるらしいわね。これはどう？ 羽川さんはやったことある？」

羽川 「ない。そして戦場ヶ原さんは一人でやったことが……？」

ケ原 「ある。……いや、これは一人でやってもおもしろい遊びだからいいんじゃないの？ 変なポーズのまま、ルーレットを回そうとして腕が攀っちゃったりして」

羽川 「阿良々木くんと今度やったら……？」

ケ原 「そうね。体に教えてもらったみたいだし。」

羽川 「あのポーズは、変態だと思われるというよりは、変態そのものよね」

羽川 「肩紐を両方崩れてるしね」

ケ原 「まさか、ダブルブロークンの使い手に巡りあおうとは。こんな格好をして、というのはキヤミとミニスカの事なんだろうとは思えけれど、でも問題なのはポーズの方よね」

羽川 「そうだね」

ケ原 「この上目隠しをすれば死角がないわ」

羽川 「あなたの目隠しフェチについては深入りを控えたいんだけど、構わないかな」

ケ原 「といったところで、来るわよ」

羽川 「来るね」

ケ原 「馬鹿登場。皆様お待たせしました、ヴァルハラコンピの馬鹿担当、神原駿河のご登場です」

羽川 「ヴァルハラコンピの馬鹿担当って……髪型が前作から変わるところを見ようよ」

ケ原 「いやもう、私たちのことはこれから『ヴァルバカコンピ』と呼んでもらって構わないわ」

羽川 「それだと、戦場ヶ原さん由来の部分が馬鹿になってるけど……」

ケ原 『ちょっと待ってくれ、すぐに裸になるから』

羽川 「神原さんは名言しか言わないね」

ケ原 「名言しか言わないし服しか脱がない」

羽川 「そりゃ服以外のものを脱がれても困るけどね」

ケ原 「恐るべき後輩よね。ところで、あのダムは我が町のダム？ そんな開発を請けているの、私たちの育った町は」

羽川 「とにかく神原さん、雰囲気を一変させるね。いきなり違うアニメになったみたい」

ケ原 「脱ぐの早いし。ほんとに全裸になってるし。自分の後輩について言う言葉じゃないけれど、何を考えているのこの子」

羽川 「うん？ でもこの子をこうしてしまったのはあなたなんでしょう？ 戦場ヶ原さんが師匠なんでしょう？」

ケ原 「うん？」

ケ原 「いやだから、エロの師匠ではあるかもしれないけれど、だけど、馬鹿の師匠ではないわけ。エロについてもね、神原のエロには淫靡さが足りないと思う。あの子は色々オープンにしすぎ、もっと秘してこそじゃない。秘め事、という言葉の美しさを、私はあの子に教え損なっちゃったわ」

羽川 「だから私は、戦場ヶ原さんは自身のフェチを、オープンにしすぎだと思いません。秘めてください」

ケ原「秘めてくださいって、中々浴びないツツコミね」

羽川「この辺りで言っている、全裸合宿はちなみに本当に冗談なの？ それとも実は本当はやってるの？ どっち？」

ケ原「さあ、私と神原が切れている頃の話だから。でもまあやりかねないとは思うわね、彼女の嗜好と、そして周囲からの慕われようを窺う限り」

羽川「そこはそこで、深入りしない方がいいかな……」

ケ原「要するに、神原は裸フェチなのよ」

羽川「それだけ聞くと、まあフェチっていうか、ノーマルだよ」

ケ原「あ、そんなことを言っていたら、神原に天罰が下った」

羽川「でも神原さん、おばあちゃんっ子だったんだね。そこはかわいい」

ケ原「一応、おばあちゃんの前では裸にならない、というルールがあるみたいね」

羽川「でも、戦場ケ原さんも前作を見る限り、家の中では裸だったのよね。しかも、阿良々木くんがいるときに。やっぱり、エロの師匠も馬鹿の師匠も、あなたなのでは……？」

ケ原「でも私は、お父さんに裸を見られた程度ではたじろがないわよ」

羽川「ギリギリかなあ、その発言」

ケ原「阿良々木くんのこんな顔見たことない」

羽川「神原さんに振り回されたのが、よっぽど腹に据えかねたんだろうね。全く同情することなく、阿良々木くん、むしろそんな神原さんを見学に行こうとしている」

ケ原「リトルな男よ、ほんと。慰めの言葉くらいかけてあげなさいと」

羽川「ちなみに、戦場ケ原さんだったら、こういうときなんて言う？」

ケ原「恥ずかしい。だらしない。悲しいと書いて裸よ」

羽川「傷口に塩を塗り込んだ……」

あ、火憐ちゃんだ。登場登場♪」

ケ原「馬鹿登場」

羽川「人の妹を馬鹿とか言わない。Bパート終了」

Bパート

ケ原「Bパート入ります。ていうか、このシーン阿良々木くん、逆立ちして歩いている人間にリアットって」

羽川「確かに危険行為ではあるよね。視聴者の皆様は絶対に真似しないでください」

ケ原「逆立ちして歩いている人間に遭遇する機会がまずないとは思うけれどね。ところで、視聴者の皆様って、市庁舎の皆様だと勘違いされないかしら」

羽川「わかりづら……」

ケ原「変なポーズで、変な妹ね、この子」

羽川「だから、人の妹の悪口を言わないの戦場ケ原さん。会ったこともないんだったら尚更」

ケ原「一話に出てきていた月火さんの方は、まあ、なんだかんだ妹だって言われたら、妹だっていう気がするけれど、こっちの子、でっかい方の妹とやらは、妹感が皆無ね」

羽川「妹感が皆無というか、妹キヤラ感が皆無だよ。ん、でもまあ、妹って実際はこんな感じなんじゃないの？ 月火ちゃんの気怠そうな感じも含めて」

ケ原「え？ じゃあこっちはやっつてすぐ逆立ちしたがるのも、リアリティだと？」

羽川 「それはまた別件。逆立ちして歩くんだったら靴は手に履いた方がいいかも」

ヶ原 「地面を掴めるようにしておきたいんじゃない」

羽川 「ここから先、ずっとこんなシュールな画だから」

ヶ原 「首ブリッジしている妹と、それを見下ろす兄。日本のアニメもなんだか、百花繚乱というか、百家争鳴というかの現状ではあるけれど、この図はおそらく、史上初めてなのではないかしら」

羽川 「初めてだったところで……」

ヶ原 「逆立ちより恥ずかしい気がする」

羽川 「阿良々木くん、結局仲良く遊び始めちゃってるし」

ヶ原 「まあ、誰に対する阿良々木くんとも違う、独特の距離感よね。強いて言うなら、やっぱり神原との付き合い方が近いのかしら」

羽川 「神原さんと火憐ちゃんとの違いは、遊び心かな。神原さんはなんだかんだ言っても生真面目だけど、火憐ちゃんは遊んじやうと場所があるから」

ヶ原 「それは師匠の出来の差ね。私が鍛えたか、阿良々木くんが鍛えたか。それがそのまま生真面目か不真面目かに出ているわけ」

羽川 「ここぞとばかりに師匠アピール……。火憐ちゃんがやつと普通に立った」

ヶ原 「妹より背が低いのが可愛いぞ」

羽川 「どうかなあ。妹がずっとブリッジしてるより、マシじゃない？」

ヶ原 「いえ、第三の選択肢があるわね」

羽川 「第三の選択肢？ え、それは私、聞かなくちゃダメ？」

ヶ原 「なんでよ聞いてよ。聞いて聞いて聞いて。私にお聞きして。あのね、阿良々木くんこそ妹さんの前では常にずっと、首ブリッジをしているの。そうすれば、身長差はごまかせる」

羽川 「火憐ちゃんは、お兄ちゃんがどんな姿勢でも、ブリッジをするだろうから、ブリッジ兄妹になる危険があるというのが一つ」

ヶ原 「まあまあ、そこには目を瞑りましょう」

羽川 「瞑らないでください。両の目を開いてください」

ヶ原 「一つ……まさか二つ目があるというのかしら」

羽川 「戦場ヶ原さんは、阿良々木くんよりも背が高いという必然性から、あなたの前でも阿良々木くんはブリッジだというのが二つです」

ヶ原 「ああ、それはない絶対ないいつまでもない、諦めました」

羽川 「はや。逆立ちしてパンツを覗きに来て欲しがってたくせに」

ヶ原 「火憐さんはここでお別れね」

羽川 「アスタラビスタ♪」

ヶ原 「そして神原家だけど」

羽川 「あっ、更に来るよ、ここから」

ヶ原 「来たわ。来たっていうか脱いだわ。裸包帯女」

羽川 「妖怪みたいに言わない」

ヶ原 「裸すぎるでしょ、ここまでの裸をアニメで披露したキャラって、そうはいないんじゃないかしら」

羽川 「だから私の知る限り、前作で包帯すら巻いていなかったヒロインが……」

ケ原 「あ、戦場ケ原女子のことを言っているんだったら違うの。彼女には事情があったのよ。彼女には、やむにやまれぬ事情があったのよ。ここでは、その理由を詳らかにできないけれど、私はその事情を知っているから、あの子を笑うことはできないわ」

羽川 「そう……。しかし、綺麗な裸だよ。鍛え方が違うんだろうけれど、前作では、私たちは大概裸になっていたけれど、神原さんだけはそういうシーンがなかったんだ」

ケ原 「私たちは大概裸になってたって、やめてそういう言い方するの。前作だってBlu-ray BOXになって並んでいるんだから」

羽川 「ああ、Blu-ray BOXになってたんだよね、そういえば」

ケ原 「だから、私たちはこう言っていかなきゃいけないの。『物語シリーズは、私たちが服を着ているアニメです』」

羽川 「すごい売り文句だね……」

ケ原 「神原だって、ギリギリ包帯を着ているでしょう？」

羽川 「包帯を着るって、マニアックすぎる……」

ケ原 「さらっとプロポーズしたわよこの男」

羽川 「そうだね」

ケ原 「私の後輩に」

羽川 「そうだね」

ケ原 「私の神原に」

羽川 「……なんで阿良々木くんがプロポーズしたことじゃなくて、神原さんがプロポーズされたことに対して怒ってるのよ」

ケ原 「いや、でも、ボロネーゼは魔法の言葉だから」

羽川 「ボロネーゼ？」

ケ原 「ああ、違ったプロポーズ。失敬、失敬、てへっ」

羽川 「素かどうか判断しにくい言い間違いを挟んでくるのをやめて。近いようで、実は『ロ』しか合っていないから」

ケ原 「ボロネーゼってどういう意味だったかしら。音楽用語で『少しずつ』という意味だったかしら」

羽川 「それは『poco a poco』かな。ボロネーゼは、パスタの一種類」

ケ原 「そうなんだ、へえ」

羽川 「本当に知らなかったの？」

ケ原 「しかし、ペペロンチーノだったりボロネーゼだったり、誤解される名称が多い料理ね、パスタって」

羽川 「ヴァルハラコンビくらいだよ、パスタの名前からそんな意味合いを見出すのは」

ケ原 「というわけで、続けてさらっと場面転換をして。あの神原を立ち直らせるだなんて、ほんとプロポーズは魔法の言葉ね」

羽川 「言い直したらすごく普通になったね」

ケ原 「ただ残念なことに、服を着ても神原は裸同然なだけだ」

羽川 「裸同然とか言わない！」

ケ原 「あれ？ えっと、このあとつてもう、神原の部屋で話おしまいになるのだけ？ 場面転換とかそういうことはなく？」

羽川 「うん、そう。神原さんの部屋で終わって、第二巻へ続く」

ケ原 「神原さんの部屋で終わって、って言うのと、なんだか阿良々木くんの人生が終わったみたいに関こえるんだけど」

羽川 「それは穿ちすぎじゃない……？」

ケ原 「どうも私の中で、終わる、イコールで阿良々木くん、という方程式が組み上がっているみたいなのよね。終わると言えば阿良々木くん。そっか、もうこの第一巻も阿良々木くんなのね……」

羽川 「すごい隠語だね……」

ケ原 「しかし、後輩にユニフォームを着て見せてくれて言うのって、実は結構変態じみた欲求じゃないかと思うんだけど、これも穿ちすぎかしら」

羽川 「いえ、それは私もそう思った」

ケ原 「髪の話をちようどしているけれど、ほんとあの子伸びるの早いわよね」

羽川 「まあ、髪の伸び方には個人差があるけれど、中でも神原さんは早かったね。ペペロンチーノがいやらしい言葉だっていうのは、ひよっとして戦場ヶ原さんが教えたの？」

ケ原 「冗談抜きで、あの子に関する全ての責任が私にあるわけじゃないの。そこまでの責を負わせないで。……これは私じゃない」

羽川 「すごいこと言うよね。先輩に対して、気後れとかしないのかなこの子……」

ケ原 「忘れないで、この子ね、先輩に部屋を掃除させている最中なのよ。なんだか楽しげに話している風ではあるけれど、この図は、阿良々木くんが神原の部屋を一人で掃除していて、神原は廊下に座ってその様子を眺めているという図なのよ」

羽川 「そういえば……」

ケ原 「なのに全く悪びれていないでしょう。まあ、スターの素質ってことになるのかもしれないけれど。上手に労働を他者に押しつけて、しかもそれに気づかないのよね。あつ、着るわよ、神原がユニフォームを」

羽川 「おおー」

ケ原 「思いの外、思いの外の画になったわね」

羽川 『「こんな感じだ」、ってどんな感じなの」

ケ原 「コスチュームプレイならぬ、ユニフォームプレイね」

羽川 「うん？ うまいこと言おうとさえしてたくない？ 普通に訳しただけだよね、それ……」

ケ原 「眼鏡秘書と眼鏡王子……どんな内容なのよ」

羽川 「戦場ヶ原さん、この辺りの素養は？」

ケ原 「まあ、人並み程度と言っておきましょう。私にもそう、イメージというのがあるのでね。対外的な、世間に向けたイメージ戦略というものがあるのよね」

羽川 「あるかなあ……」

ケ原 「見て。ほら、全く手伝おうとしない彼女の姿を。むしろ、阿良々木くんの働きっぷりを監視している風よ」

羽川 「うーん……でも、恥ずかしくないのかなあ」

ケ原 「これはわざと見せているんだと思う」

羽川 「変態じゃない」

ケ原 「だから変態なんだってあの子は。大丈夫、ここから阿良々木くんが反撃に出るから」

羽川 「ああ、これね」

ケ原 「中々痛いところを点いてくるでしょ、この男は」

羽川 「阿良々木くんにとって、神原さんって、実は妹みたいなものかもしれないね」

ケ原 「存在が囁かれていた、中くらいの妹というのは、実は神原のことだったというのね。それは壮大な伏線だったわ」

羽川 「いや、そんなことは言っていないけれど……」

ケ原 「駿河の『する』はマッチを擦るの『擦る』で、彼女もファイヤーシスターズのシークレットメンバーだったと」

羽川 「やっぱりうまく組み込めてないよ……ていうか、神原さんがここまで動揺する理由もよくわからないけどね。ハンサム好きを指摘されたくらいで、なんでアイデンティティが崩壊しているのよ」

ケ原 「テンパったらとりあえず脱ごうとするこの態度」

羽川 「うん、よくないね」

ケ原 「私の教え通り」

羽川 「教え通りですかい」

ケ原 「この画面、シニールよね」

羽川 「それにしても神原さん、綺麗な胴体だね。うっすらと筋肉が見えて」

ケ原 「何フエチって話をするんだったら、羽川さんは腹筋フエチね。また阿良々木くん、いやらしい顔してるわね」

羽川 「どれだけ神原さんの優位に立てるのが嬉しいんだろうね……」

ケ原 「この神原すごくかわいい。ずっとこれで通せばいいのに」

羽川 「無茶言うね。前作で千石ちゃんがこの画を見たことがあるなあ……」

ケ原 「え、じゃあそれを確認しようと思ったら、今はもうBlu-ray BOXを買うしかないってこと？」

羽川 「そんな商売つ気のあることは言ってます。一言も言ってます」

ケ原 「このシーンが来たということは、もうそろそろ第一巻も阿良々木くん、ということね」

羽川 「うん、おしまいです」

ケ原 「いや、本当に阿良々木くんが終わりそうな展開なんだけれど、大丈夫かしら」

羽川 「まあまあ、兄妹のじゃれ合いだと思って」

ケ原 「厳しい解釈ね。えーと、阿良々木くんがこの後阿良々木くんったかどうかは第二巻に続くということよ」

で」

羽川 「第二巻からはいなくなってるかもね、阿良々木くん」

ケ原 「あるいは神原がね」

羽川 「二人ともいなくなったりしてね」

ケ原 「あ、神原も腹筋フエチなかしら」

羽川 「私の好みを既成事実みたいにして話を進めないで。……このセリフ、神原さんが言うともまた違った味わいがあるね」

ケ原 「そうね、本当にこれで第二話終わっていいの？ 異常系日常アニメとして括られちゃわない？ 阿良々木くんの語りに入ったけれど、これはさすがにいい話風には締められないでしょう？ ちゃんちゃん」

ED

羽川 「はい。というわけで、ご静聴ありがとうございました」

ヶ原「えー、私のファンの皆様に告知です。ご安心ください、第二巻では私が大活躍。彼女が涙を吞んで愛する恋人を拉致監禁した、やむにやまれぬ理由がついに明かされます。全員納得します」

羽川「嘘はよくないよ……」

ヶ原「嘘はよくない、重い言葉ね。そんな的確な言葉を知っているだなんて、羽川さんは何でも知っているのね」

羽川「いや、恒例行事のように、義務のように振られても、本編でもまだ言っていないセリフを、副音声で言うわけがないでしょう？」

ヶ原「そういえば前作では、この辺りで第二巻の副音声を誰が担当するのか、予告してたわね。では予告。第二巻は私と神原のコンビでお送りします」

羽川「お？ 冗談じゃなかったんだ。あれ？でも前作でヴァルハラコンビでは二度とやらないって言ってなかったっけ？」

ヶ原「ヴァルバカコンビでやるから大丈夫、何の問題ありません」

羽川「仕分けられたゾンビ企画みたいだね……」

ヶ原「裏音声など必要ないということを、私と神原とで証明してみせるわ。まあ、このあと皆さん裏音声をお聞きになるんでしょうけれど、別に止めません。しかし、それがあなたたちの聞く最後の裏音声になると、私はここで宣言しておきましょう」

羽川「そういうの、大体振りになるけど大丈夫……？」

ヶ原「私も神原もちやんと学んでいるから大丈夫。コメンタリーというのは画面を解説するものだ、決してフリートークの場ではない、ということをきっちり世に示してくるから」

羽川「それは確実に振りに入ってるなあ……それでは、ありがとうございます」

ヶ原「ありがとうございます」

予告

羽川「あつ、まだ予告があった」

ヶ原「なんてこと。私がしゃべった私の予告を私が失念するだなんて。私にあるまじき失態だわ」

羽川「あることはわかっていたのに、今回テレビ放映時に予告ってなかったから、ついうっかりしてたね。じゃあ、改めて」

ヶ原「改めましょう」

羽川「私たちの拙いガールズトークに一時間お付き合いいただき、本当にありがとうございます。アニメ偽物語第一巻かれんビー（上）副音声、お相手は羽川翼と」

ヶ原「何かいいことあったら何なの、戦場ヶ原ひたぎでした」

羽川「裏音声も聞いてあげてくださいね」